

<夏期例会報告>

八千穂高原の植物観察会

中山 洸（佐久市鍛冶屋194）

第156回例会は、平成10年6月27～28日に南佐久郡八千穂高原で行なわれた。参加者は小口好久、池田登志男、佐藤利幸、菅原敬、篠原喜運、渋谷美佐緒、相馬敬子、川上美保子、宮島吉彦、田久保若菜、守山拓弥、信大生の高島、藤田、吉本の各氏と中山洸（幹事）の15名であった。

翌日参加の加藤夫妻（名古屋市）と信大生5名を加えて22名という盛況であった。

第一日目は県自然保護研究所友の会の観察会が当地で行なわれていたので、早く着いた人たちは、それに参加する人もあったが、最終の到着者は道に迷ったとのことで5時30分頃となる。便りの中へ案内図を同封しておけばよかったと幹事としては後悔であった。

全員揃ったところで夕食会、自己紹介等を含めて楽しく盛り上がり、10時近くに終了する。

第二日目は昨晚からの雨が降り止まず、朝食を食べながら様子をみることになった。9時30分頃、何とか雨も上がったので行動を開始する。予定では八柱山～雨池方面の観察をすることになっていたが、時間も遅くなり天候の心配もあったので、自然園内をまわることになった。

この自然園は有料で公開されているが、研修会ということで八千穂村の御厚意で無料で入園させていただいた。正式名称は“八千穂高原自然園”といい県立の自然公園である。標高1500～1600mに位置し、落葉樹の二次林域にあるが、山地帯と亜高山帯の接点にあるため、シラカンバとダケカンバが混交したり、林内にはコメツガ、シラビソ、トウヒなどの針葉樹も散在する。その他にアカマツ、ウラジロモミなども点々と生育し、カラマツの植

林も一部に含まれている。

この園内で観察できた樹木としては、上記針葉樹の他に、ミズナラ、ヤハズハンノキ、ハリギリ、ユモトマユミ、ミヤマアオダモ、コバノトネリコ、リュウブなど、低木としてガマズミ、クサボケ、ニワトコ、イボタヒョウタンボク、オオカメノキ、オニツルウメモドキ、ノリウツギ、ニッコウナツグミ、ノイバラ、ザリコミ、ナツハゼ、サワフタギなどのほか、カエデ類としてアサノハカエデ、モトゲイタヤ、ウリハダカエデ、オガラバナ、ウリカエデ、サクラ類ではミヤマザクラ、エゾヤマザクラ、ウワミズザクラ、タカネザクラ、ツツジ類ではサラサドウダン、トウゴクミツバツツジ、レンゲツツジ、また、イヌコリヤナギ、バッコヤナギ、オノエヤナギなどのヤナギ類、クマイチゴ、ミヤマウラジロイチゴ、シナノキイチゴ、ミヤマニガイチゴなど、草本類では、バイケイソウ、コバギボウシ、オオバギボウシ、スズラン、アオスズラン、アキノキリンソウ、チゴユリ、ウメガサソウ、クモキリソウ、ソバナ、ミヤマママコナ、ベニバナイチヤクソウ、コオニユリ、ヤマハハコ、ササバギンラン、イチヤクソウ、ツバメオモト、マルバダケブキ、ヤツタカネアザミ、シロバナエンレイソウ、ハナチダケサシ、メドハギ、オヤマリンドウ、ツクバトリカブトなどの他に、ヘビノネゴザ、イヌガンソク、ワラビ、ヤマドリゼンマイ、フユノハナワラビ、オシダ、ミヤマメシダ、ミヤマワラビなどのシダ植物も多く見られ、佐藤利幸先生より親切な御指導をいただいた。

午後1時頃に宿舎へもどり、昼食とした。2時に出発し、白駒池へ向かった。ここは、北八ヶ岳の中でも広大な亜高山針葉樹の原生林地帯である。オオシラビソ、シラビソ、トウヒ、コメツガなどの樹高20～30mになる森林で、林床には一面にコケ類が被い、低木や草本類の少ない昼なお暗い地帯である。

駐車場へ車を入れ歩道に沿って観察する。林冠の開けたところにはフッキソウ、クロウ

スゴ、コヨウラクツツジ、コケモモ、ヒメウスノキなど針葉樹林に特有な低木、またシラネワラビ、シノブカグマ、タカネサトメシダ、ヘビノネゴザなどのシダ植物も観察できた。

青苔荘という山小屋から池の端に出て、白駒荘までにはハクサンシャクナゲ、クロベ、サワラの低木などが、水辺を被っていた。また、水中には、全国的にも珍しいホソバウキミクリが多くみられ、感動であった。

4時近くに駐車場までもどり、解散した。

今回の例会は天候不順のため、計画したコースを歩けなかったが、多くの皆さんに御参加いただき有意義であった。

宿舎のロッジハヶ嶺さんには大変お世話になった。また、講師の池田登志男先生には精力的に御説明をいただき、併せて感謝申しあげ、例会の報告といたします。

<秋季例会報告>

三信国境茶臼山の植物観察会

浅野一男(東京都町田市本町田3133-5
藤の台団地2-13-202)

第157回例会は平成10年9月26日(土)～27日(日)に、三信国境にそびえる茶臼山で行われた。参加者は林一六会長、栗倉栄(静岡県豊田町)、今井健樹、大塚孝一、川上美保子、佐藤利幸、菅原敬、竹重聡、橋渡勝也、松田行雄、宮島吉彦、浅野一男の計12名であった。

第1日目：午後2時、売木村旭にある村営ささゆり荘に集合し、林会長の挨拶、佐藤幹事の日程その他の連絡、浅野による「茶臼山概念図」に基づいた観察コースと観察しうる植物の説明の後、茶臼山東北麓にある売木村アテビ島へ向かった。車を小鳥茶屋(標高1200m)において歩み出すと、まず、迎えてくれたのはスズタケ林床のブナ林。この表日本を代表するブナ林を前にして、話は中部地方を南北に切った時のブナ林の組成構造の違いにまで及んだ。ブナとイヌブナの違い、ナツツバキとリョウブの木肌の違いも実物によ

って明らかにされた。沢筋ではテバコモミジガサを見つけ、モミジガサとの区別点が披露された。アテビとこの地域で呼ばれるクロベの林内ではセリバシオガマ、アスヒカズラ、湿地ではザゼンソウが確認できた。植栽品のミズバショウも健在で、よく定着繁茂していた。秋だというのにヒメカンアオイが開花中で、それを材料に話は南信から天城にいたるヒメカンアオイの変異に及び、しばし時を忘れた。また、ヒメカンアオイの芽生え直後から3年目までの個体と同じ場所に生えていて、幼期の成長過程の説明を実物を目の当たりにしながら聞くことができたのもうれしい収穫だった。そうこうするうち4時も迫り、空は今にも泣き出しそうだし、山懐の窪地の林内はあまり見通しがきかなくなったので、急遽アテビ島を後にダンドタムラソウの自生地がある第二の目的地せせらぎの径に向かった。

せせらぎの径は売木川上流軒川の氾濫原の上に立つ半湿性林の中を縫う小径である。売木村が遊歩道として整備しているが、昔の柚道の面影をよく残している。そこではまずソーセージのような果実をつけたツチアケビの歓迎を受けた。林内を進むにつれ、ツガ、ウラジロモミ、ブナ、イヌブナ、ミズナラ、サワシバ、コハウチワカエデ、アサノハカエデ、チドリノキ、コミネカエデ、オオモミジ、ムシカリ、コバノガマズミ、フウリンウメモドキ、ソヨゴ、ニシキウツギ、ヤマアジサイ、タマアジサイ、コアジサイ、ノリウツギ、ツルシキミ、ハイイヌツゲ、ミヤマクロモジ、シロモジ、クロモジ、アブラチャン、イワガラミ、ツルアジサイ、ウワミズザクラ、コシアブラ、タンナサワフタギ、ニワトコ、ミツバツツジ、コバノミツバツツジ、アクシバ、ムラサキシキブ、ヒメカンアオイ、バイケイソウ、ヒカゲノカズラ、ホソバトウゲシバ、マンネングサ、シラネワラビ、シノブカグマ、ミヤマイタチシダ、タニギキョウ、サラシナショウマ、オクモミジハグマ、マルバノイチヤクソウと、記録が蓄積された。売木峠近く、川が90°左折したあたりでまずバイカオウレン、次いでダンドタムラソウを観察。ダンド